

国公立大文系・二次国語対策

神戸大学の古文

基礎から応用

現代語訳

問題

演習問題 目次

◎ 神戸大学の現代語訳問題 (全43問)

中世6, 中古5, 近世1 / 12、説話4, 軍記物3, 物語2, 日記2, 史書1 / 12

- 【一】 2023 神戸大学 2/25 前期文 国際人間科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(3)
- 《出典》鴨長明「発心集」【中世・説話】
- 【二】 2022 神戸大学 2/25 前期文 国際人間科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(6)
- 《出典》「伊勢物語」【中古・歌物語】
- 【三】 2021 神戸大学 2/25 前期文 国際人間科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(8)
- 《出典》「平家物語」【中世・軍記物】
- 【四】 2020 神戸大学 2/25 前期文 国際人間科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(10)
- 《出典》「讃岐典侍日記」【中古・女流日記】
- 【五】 2019 神戸大学 2/25 前期文 国際人間科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(13)
- 《出典》「今昔物語集」【中古・説話】
- 【六】 2018 神戸大学 2/25 前期文 国際人間科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(15)
- 《出典》紫式部「源氏物語 濤標巻」【中古・作り物語】
- 【七】 2017 神戸大学 2/25 前期文 国際人間科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(18)
- 《出典》慈円「愚管抄」【中世・史書】
- 【八】 2016 神戸大学 2/25 前期文 国際文化 発達科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(20)
- 《出典》「今昔物語集」【中古・説話】
- 【九】 2015 神戸大学 2/25 前期文 国際文化 発達科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(22)
- 《出典》『平治物語』【中世・軍記物】
- 【十】 2014 神戸大学 2/25 前期文 国際文化 発達科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(24)
- 《出典》「古今著聞集」【中世・説話】
- 【十一】 2013 神戸大学 2/25 前期文 国際文化 発達科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(26)
- 《出典》「平家物語」【中世・軍記物】
- 【十二】 2012 神戸大学 2/25 前期文 国際文化 発達科 法 経済 経営〔課題〕 月 日まで〕〔済〕 月 日〕……………(28)
- 《出典》『松蔭日記』「ゆかりの花」【近世・日記】
- 解答……………(31)

次の文章を読んで、問一〜五に答えなさい(本文の一部を省略したところがある)。

近きころ、蓮花城れんげじやうといひて、人に知られたる聖ひじりありき。登蓮法師とうれんあひ知りて、ことにふれ、情をかけつつ過ぎけるほどに、^①年としころありて、この聖のいひけるやうは、「今は、年にそへつつ弱くなりまかれば、死期の近付くこと疑ふべからず。終はり正念にてまかりかくれんこと、極まれる望みにて侍るを、心の澄む時、入水じゆすいをして、終はり取らんと侍る」といふ。

登蓮聞き、驚きて、「あるべきことにもあらず。今一日なりとも、念仏の功を積まんとこそ願はる **a**。さやうの行ぎやうは愚痴ぐちなる人のする業なり」といひて、諫めけれど、さらにゆるぎなく思ひ固めたことと見えければ、「かく、これほど思ひ取られたらんに至りては、留むるに及ばず。^②さるべきにこそあらめ」とて、そのほどの用意など、力を分けて、もろともに沙汰しけり。

終つひに、桂川の深き所に至りて、念仏高く申し、時経て、水の底に沈みぬ。その時、聞き及ぶ人、市の如く集まりて、しばらくは、貴たじみ悲しむこと限りなし。登蓮は年としころ見なれたりつるものをと、あはれに覚えて、涙を押さへつつ帰りにけり。

かくて日ひころ経るままに、登蓮物の怪めかしき病をす。あたりの人あやしく思ひて、こととしけるほどに、霊あらはれて、「ありし蓮花城」と名のりければ、「**a**」^③の**こと**、**け**いと**覚え**す。年としころあひ知りて、終はりまでさらに恨みらるべきことなし。いはんや発心のさまなほざりならず、貴たじくて終はり給ひしにあらずや。かたがた何の故にや、思はぬさまにて来たるらん」といふ。

物の怪のいふやう、「そのことなり。よく制し給ひしものを、我が心のほどを知らで、いひがひなき死にをして侍り。さばかり人のためのことにもあらねば、その際にて思ひ返すべしとも覚えざりしかど、いかなる天魔のしわざにてありけん、まさしく水に入らんとせし時、たちまちにくやくしくなんなりて侍りし。されども、さばかりの人中に、いかにして我が心と思ひ返さん。^④あはれ、ただ今制し給へか」と思ひて、目を見合せたりしかど、知らぬ顔にて、『今はとくとく』ともよほして、沈みてん恨めしさに、何の往生のことも覚えす。すずろなる道に入りて侍るなり。このこと、我が愚かなる過とがなれば、人を恨み申す **b** ならねど、最期に口惜しと思ひ

し一念によりて、かく詣で来たるなり」といひけり。

これこそげに宿業しゅくごうと覚えて侍れ。かつはまた、末の世の人の誠まことめとなりぬべし。

人の心、はかりがたきものなれば、必ずしも清淨質直しじつよくの心よりも起こらず。あるいは、勝他名聞しょうたみやうもんにも住ぢうし、あるいは、憍慢嫉妬けうまんをもととして、愚かに、身灯しんとう、入海するは浄土に生まるるぞとばかり知りて、心のはやるままに、かやうの行を思ひ立つことし侍りなん。すなはち外道げだうの苦行に同じ。大きな邪見といふべし。その故に、**④**火水くわすいに入る苦しみくしみのめならず。その志深からずは、いかが堪へ忍ばん。苦患くげんあれば、また心安からず。仏の助けよりほかには、正念ならんこと極めてかたし。

〔中略〕

ある人のいはく、「諸々の行ひは、みな我が心にあり。みづから勤めて、みづから知るべし。余所よせにははからひ難きことなり。すべて過去の業因も、未来の果報も、仏天の加護も、うち傾きて、我が心のほどをやすくせば、自おのづから推し測られぬべし。かつがつ、一ことを顯あらはす。もし人、仏道を行はんために山林にもまじはり、ひとり曠野くわうやの中にも居らん時、なほ身を恐れ、命を惜しむ心あらば、必ずしも仏擁護ぶつようこし給ふらんとは憑たのむべからず。垣壁かきかべをも困のがひ、遁のがる**c**構かまへをして、みづから身を守り、病をたすけて、やうやう進まんことを願ひつべし。もしひたすら仏に奉りつる身ぞと思ひて、虎狼ころう来たりて犯すとも、あながちに恐るる心なく、食物絶えて飢ゑ死ぬとも、憂はしからず覚ゆるほどになりなば、仏も必ず擁護ようこし給ひ、菩薩しやくしやくも聖衆しやうじゆも来たりて、守り給ふ**d**。法の悪鬼も毒獣も、便りを得べからず。盗人は念を起こして去り、病は仏力によりて癒えなん。これを思ひ分かず、心は心として浅く、仏天の護持を頼むは、危ふきことなり」とぞ語り侍りし。**⑤**このこと、さもと聞きこゆ。

〔注〕

○愚痴——愚かでももの道理を理解できないこと。

○沙汰——手配。

○宿業——前世につくった因業。

○憍慢——おごり高ぶり。

○天魔——仏道を妨げる魔物。

○勝他名聞——他より勝っているという良い評判。

○身灯——焼身。

(『発心集』より)

○外道——仏教以外の教えを卑しめていう語。異教・異端。

○正念——乱れなく正しい信仰心。

問一 傍線部①～④を、それぞれ現代語訳しなさい。

次の文章を読んで、問一～六に答えなさい。

昔、おほやけおぼして使うたまふ女の、色ゆるされたるありけり。大御息所おほみよすんせころとていますかりけるとこなりけり。殿上にさぶらひける **a** なりける男の、まだいと若かりけるを、この女あひ知りたりけり。男、女がた許されたりければ、女のある所に来て向かひをりければ、女、「いとかたはなり。身もほろび **b** ん。①かくなせ」と言ひければ、

思ふには忍ぶることぞ負け **c** ける逢ふにしかへばさもあらばあれ

と言ひて、曹司さうしに下りたまへれば、例のこの御曹司には、人の見るをも知らでのぼりぬければ、この女、思ひわびて里へ行く。されば、何のよきことと思ひて、いき通ひければ、皆人聞きて笑ひけり。つとめて主殿寮とのもつかさの見るに、杓くつはとりて、奥に投げ入れてのぼりぬ。かくかたはにしつつありわたるに、身もいたづらになり **d** べければ、つひにほろび **d** べしとて、この男、「いかにせん。わがかかる心やめたまへ」と仏神にも申しけれど、いやまさりにのおおほえつつ、なほわりなく恋しうのみおほえければ、陰陽師おんやうじ、巫かむなまよびて、恋せじといふ祓はらの具してなむ行きける。祓へけるままに、いとどかなしきこと数まさりて、ありしよりけに恋しくのみおほえければ、

恋せじと御手洗河みたらしがはにせしみそぎ **A** 神かみはうけずもなりにけるかな

と言ひてなむいける。

この帝は顔かたちよくおはしまして、**②** 仏の御名を御心にいれて、御声はいとたふとくて申したまふを聞きて、女はいたう **B** 泣きけり。「かかる君に仕うまつらで、宿世すくせつたなくなしきこと、この男にほだされて」とてなむ泣きける。かかるほどに、帝聞こしめしつけて、この男をば流しつかはしてければ、この女のいとこの御息所、女をばまかでさせて、蔵にこめてしをりたまうければ、蔵にこもりて泣く。

海人あまの刈る藻にすむ虫の我からと音をこそなかめ世をばうらみじ

と泣きをれば、この男、人の国より夜ごとに来つつ、笛をいとおもしろく吹きて、声はをかしうてぞあはれに歌ひける。かかれば、この女は蔵にこもりながら、^③それ
にぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

さりともと思ふらんこそかなしけれあるにもあらぬ身を知らずして

と思ひをり。男は、女し逢はねば、かくし歩きつつ、人の国に歩いてかく歌ふ。

② いたづらに行きては来ぬるものゆゑに見まくほしさにいさなはれつつ

みづのを 水尾の御時なるべし。大御息所も染殿きさきの後なり。五条の後とも。

〔注〕

○色ゆるされたる——身分が高く、特別な色の衣装の着用を許されていること。

○大御息所——清和天皇の母である藤原明子。

○女がた許されたりければ——女官の控えるところに、出入りを許されていたこと。

○かたは——見苦しいこと。よくないこと。

○曹司——宮中にある女官の居室。

○主殿寮——宮中の調度の管理や整備を担当した役所。ここではそこに所属する役人のこと。

○この帝——清和天皇のこと。後出の「水尾」も同じ。

○しをる——折檻せつかんする。こらしめる。

問一 傍線部①～③をわかりやすく現代語訳しなさい。

(『伊勢物語』より)

次の文章は、平重盛について書かれたものである。これを読んで、問一〜五に答えなさい。

天性てんせいこの大臣おんじんは不思議の人にて、未来のことも、かねてさとりたまひけるにや、去んぬる四月七日の夢に見たまひけるこそ不思議なれ。たとへば、いづくとも知らぬ浜路はまぢをはるばると歩みきたまふほどに、道の傍らに大きな鳥居のありけるを、「あれはいかなる鳥居やらん」と問ひたまへば、「春日大明神の御鳥居なり」と申す。人多く群集したり。その中に法師の首を一つ差し上げたり。「さてあの首はいかに」と問ひたまへば、「これは平家太政入道殿、悪行超過したまへるによつて、当社大明神の召し捕らせたまひて候」と申すと覚えて、夢うちさめ、「当家は保元・平治よりこのかた、度々の朝敵を平らけて、勳賞けんじやう身に余り、かたじけなく一天の君の御外戚ぐわいせきとして、一族の昇進六十余人、二十余年のこのかたは、楽しみ榮え、申すはかりもなかりつるに、入道の悪行超過せるによつて、一門の運命すでに尽きんずるにこそ」と、来し方行く末のこともおぼしめし続けて、**(A) 御涙にむせばせたまふ。**

をりふし、妻戸をほとほと打ちたく。「誰ぞ。あれ聞け」とのたまへば、「瀬尾太郎兼康が参つて候」と申す。「いかに、何事ぞ」とのたまへば、「ただ今不思議のこと候ひて、夜の明け候はんが違ふ覚え候ふ間、申さんのために参つて候。**①御前の人をのけられ候へ**」と申しければ、大臣、人をはるかにのけて、御対面あり。さて兼康見たりける夢のやうを、始めより終はりまで詳しう語り申し **a** が、大臣の御覽じたりける御夢に少しもたがはず。さてこそ、瀬尾太郎兼康をば、神にも通じたるものにてありけりと、大臣も感じたまひけれ。

その朝あした、嫡子ちやくし権亮ごんりやう少将せうしやう維盛これもり、院の御所へ参らんとて出でさせたまひたりけるを、大臣呼び奉りて、「人の親の身として、かやうのことを申せば、きはめてをこがましけれども、御辺ごへんは、人の子どもの中には優れて見えたまふなり。但しこの世の中の有り様、いかがあらむずらんと、心細うこそ覚ゆれ。貞能さだよしはないか。少将に酒勧めよ」とのたまへば、貞能御酌に参りたり。「この杯さかづきをば、まづ少将にこそ取らせなければ、**②親より先にはよも飲みたまはじなれば**、重盛まづ取り上げて、少将にささん」とて、三度受けて、少将にぞさされ **b**。少将また三度受けたまふとき、「いかに貞能、**③引出物ひきだすものせよ**」とのたまへば、かしこまつて承り、錦の袋に入れたる御太刀を取り出だす。「あはれ、これは家に伝はれる小鳥こがらすといふ太刀やらん」など、よにうれしげに思ひて見たまふところに、さはなくして、大臣葬のと

き用ゐる無文^{むもん}の太刀にてぞありける。その時少将けしき変はつて、よにいまはしげに見たまひければ、大臣涙をはらはらと流して、「いかに少将、それは貞能がとがにもあらず。そのゆゑはいかにといふに、この太刀は大臣葬のとき用ゐる無文の太刀なり。入道^{にちだう}いかにもおはせんとき、重盛がはいて供せんとて持ちたりつれども、今は重盛、入道殿に先立ち奉らんずれば、御辺に奉るなり」とぞのたまひける。少将これを聞きたまひて、とかくの返事にも及ばず、涙にむせびうつぶして、その日は出仕もしたまはず、^④引きかづきてぞふしたまふ。その後大臣熊野へ参り、下向して病つき、幾ほどもなくして、つひに失^うせたまひけるにこそ、げにもと思ひ知られ

(『平家物語』より)

[注]

- この大臣——平重盛のこと。
- 平家太政入道——平清盛。重盛の父。
- 妻戸——出入り口の両開きの戸。
- 御辺——代名詞。そなた。
- 無文——^{まき}蒔絵や彫刻などの装飾が施されていないこと。
- 春日大明神——現在の奈良市にある春日大社。
- 一天の君——天皇の尊称。
- 瀬尾太郎兼康——清盛に仕え、活躍した武士。
- 貞能——平貞能。重盛に仕えた。

問一 傍線部①～④を現代語訳しなさい。③は、具体的な内容を明らかにすること。

次の文章は『讚岐典侍日記』の一節である。讚岐典侍は堀河天皇（一〇七九～一一〇七）に仕え、天皇の死後はその皇子の鳥羽天皇（一一〇三～一一五六）に仕えた。次の場面には、鳥羽天皇に仕え始めた頃、故堀河天皇のことが思い出されて仕方がない作者の様子が描かれている。これを読んで、問一～五に答えなさい。

明けぬれば、いつしかと起きて、人々「めづらしき所々見ん」とあれど、具してありかば、いか物のみ思ひいで、**①御前**のおはしまして、「いざいざ、黒戸のみちをおれが知らぬに、教へよ」と仰せられて、引き立てさせ給ふ。参りて見るに、清涼殿、仁寿殿いにしへに変はらず。大盤所、**②**昆明池の御障子、今見れば、見し人にあひたるこちす。弘徽殿に皇后宮おはしまししを、殿の御とのみどころになりたり。黒戸の小半菝の前に植多おかせ給ひし前栽、心のままにゆくゆくと生ひて、御春の有軸が、

君が植多し一むらすき虫のねのしげき野辺ともなりにけるかな

といひけんも思ひいで **(b)**。

御溝水の流れになみたてるいろいろの花ども、いとめでたき中にも、萩の色こき咲きみだれて、朝の露玉をつらぬき、夕べの風なびくけしき、ことに見ゆ。これを見るにつけても、**③御覽せましかば、**いかにめでさせ給はましと思ふに、

萩の戸におもがはりせぬ花みても昔をしのぶ袖ぞつゆけき

と思ひあたるを、人はいはんも、同じ心なる人もなきに、あはせて、事のはじめに漏り聞こえん、よしなければ、承香殿を見やるにつけても、思ひいで **(c)** ば、里につくづくと思ひつづけ給はんとおしはかりて、これを奉りしかば、

思ひやれ心ぞまどふもろともに見し萩の戸の花をきくにも

思へば、さて同じさまにてしありかせ給ふだに、さおぼすなり。まして、つくづくとまぎる方なく思ひつづけけんは、おしはかられてぞある。かくであるしもぞ、今すこし思ひいで **(d)** 。

かくて長月になりぬ。九日、御節句おんせくまゐらせなどして、十余日じふよかにもなりぬ。つれづれなるひるつかた、暗部屋くらべやの方を見やれば、御経教へさせ給ふとて、「よみし経を、よくしたためてとらせん」と仰せられて、御おこなひのついでに二間ふたまにて、たちておはしまして、したためさせ給ひて、^⑤局におりたりしに、御経したためて持て参りてわらはれんとぞおぼし召して、あまりなるまでかしづかせ給ひし御事は、思ひ出でらるるに、御前におはしまして、「われ抱きて障子の絵見せよ」と仰せらるれば、^①よろづさむる心地すれど、朝餉あさぐれひの御障子の絵、御覽せさせありくに、夜御殿よるのおとどの壁に、あけくれ目なれて覚えんとおぼしたりしがく樂を書きて、おしつけさせ給へりし笛の譜の、おされたるあとの、壁にあるを見つけたるぞあはれなる。

笛のねのおされし壁のあと見れば過ぎにし事は夢とおぼゆる

かなしくて袖を顔におしあつるを、あやしげに御覽ずれば、^④心得させまゐらせじとて、さりけなくもてなしつづ、「あくびをせられて、かく目に涙のうきたる」と申せば、「みな知りてさぶらふ」と仰せらるるに、あはれにもかたじけなくもおほえさせ給へば、「いかに知らせ給へるぞ」と申せば、「ほ文字のり文字のこと思ひ出でたるなめり」と仰せらるるは、堀河院の御事とよく心得させ給へると思ふも、^②うつくしうて、あはれもさめぬる心地してぞ笑まるる。かくて九月もはかなく過ぎぬ。

(『讃岐典侍日記』より)

[注]

○黒戸——清涼殿の北廂ひさしの北側にある部屋。持仏堂として使われた。

○清涼殿——天皇の日常の居所。大盤所、萩の戸、二間、朝餉間、夜御殿など多数の部屋からなっていた。

○仁寿殿——はじめ天皇の日常の居所。のちに内宴などの行事を行う場所となった。

○大盤所——清涼殿の西側にある部屋。女房たちの詰所。

○昆明池の御障子——清涼殿東側の弘廂ひろびさしに置いた衝立障子。

○半部——格子の付いた板戸。内側または外側につり上げて開ける。

○弘徽殿——後宮の殿舎の一つ。清涼殿の北に位置する。皇后、中宮、女御などが住んだ。

○御春の有輔——生没年不詳。平安時代前期の歌人。

- 御溝水——清涼殿の東庭を流れる溝の水。
- 萩の戸——清涼殿の夜御殿の北側にある部屋。
- 承香殿——後宮の殿舎の一つ。仁寿殿の北に位置する。女御などが住んだ。
- 二間——清涼殿の夜御殿の東側にある部屋。夜間、僧が伺候して天皇を守護する修法を行った。
- 朝餉——朝餉間。清涼殿の西廂の一画にある、天皇が食事をする部屋。
- 夜御殿——清涼殿の天皇の寝所。
- ほ文字、り文字——笛の楽譜の音を表す文字。

問三 傍線部①～④を、動作の主語を明示して、現代語訳しなさい。

次の文章を読んで、問一〜五に答えなさい。

今は昔、越中の守藤原たもとし為善といひける博士の子に、惟規のぶのりといふ者あり。為善が越中守くわんじゆになりて下りける時に、惟規は当職の藏人くわんざうじんにてありければ、え具しても下らずして、叙爵して後にぞ下りけるに、惟規、道より重き病つきたりけれども、然りとて道に留まるべきにあらねば、構へて下り着きにけり。国に行き着ければ、^①限りなる様ようになりなりにけり。父為善、惟規下ると聞きて、喜びて待ちつけたるに、かく限りなる様なれば、あさましく思ひて、嘆き騒ぐこと限りなし。

さて、^②万よろづにあつかひけれども癒えずして、無下に限りになりければ、「今はこの世のことは益やくなかり。後の世のことを思へ」と言ひて、^③さとりありやむことなかりける僧を枕上に据ゑて、念仏など勧めさ^④せむとしけるに、僧、惟規が耳に当てて教へけるやう、「地獄の苦患くげんはひたぶるになりぬ。言ひ尽くすべからず。まづ中有ちゆうちゆうといひて、生いまだ定まらぬ程は、遙かなる広野に鳥獸などたになきに、ただ独りある心細さ、この世の人の恋しさなどの堪へ難さ、推し量らせたまへ」など言ひければ、惟規これ聞きて、息の下に、「その中有の旅の空には、嵐にたくふ紅葉、風に随ふ尾花などの本に松虫などの音などは聞こえぬにや」と、ためらひつつ息の下に言ひければ、僧、憎さのあまりに、いと荒らかに、「何の料れうにそれをば尋ねたまふぞ」と問ひければ、惟規、「然らば、それらを見てこそはなぐさめ」と、うち休みつつ言ひければ、僧、この事を、「いと狂ほし」と言ひて^⑤逃けて去さにけり。

父、「^⑥なほ働かむ限りは」と思ひて、添ひあてまもりければ、惟規、二つの手を挙げてかよりけるを、心も得で見あたりけるに、傍らなる人、「もし物書かむなど思すにや」と心得て問ひければ、うなづきければ、筆をぬらして、紙を具して取ら^⑦せたりければ、かく書きたりけり。

都にもわびしき人のあまたあればなほこのたびはいかむとぞ思ふ
と書きけるに、果ての「ふ」文字をばえ書き果てて息絶えにければ、父なむ、「^⑧然なめり」と言ひて、その「ふ」文字を書き添へて、「形見に^⑨せむ」とて置きて、常に見つつ泣きければ、涙にぬれて果てには破れ失せにけり。父、京に帰り上りて語りければ、その頃、これを聞く人いみじくあはれがりけり。

これを思ふに、^⑩いかに罪深かりけむ。三宝のこころを心にかけて死ぬる人、なほし悪道を逃るることは難かたかなるに、これは、ひとへにその方をば離れければ、悲し

きことなり。かくなむ語り伝へたるとや。

〔注〕

○藤原為善・惟規——平安時代の貴族。

○当職の——現職の。

○中有——死後、次の生が決まるまでの四十九日間。

○かよる——近づけるしぐさをする事。

○三宝——仏教で重視されている、仏・法・僧のこと。

○悪道——現世で悪事を働いた者が、死後行くことになる苦しみの世界。

問三 波線部①～④を、それぞれ現代語訳しなさい。④は「然」の内容を明らかにすること。

（『今昔物語集』より）

次の文章は、『源氏物語』の一節である。朱雀帝の外戚である右大臣の権勢が強まるなか、孤立を深めて行く光源氏は、自らの判断で須磨へ退去した。やがて須磨の地を離れ、明石に移り、そこで「明石の君」と結婚し、娘（「明石の姫君」）をもうけた。まもなく光源氏は朱雀帝の命により都に呼び戻され、妻と娘を明石に残したまま帰京した。その後、明石の姫君が将来、后となる占い結果を得た光源氏は、都から遠く離れた明石の地で、后たるにふさわしく明石の姫君を養育するために、宮仕え経験のある女性（「宣旨の娘」）を乳母（授乳・養育係）として派遣することにした。派遣に先立って、宣旨の娘がしかるべく乳母としての役割を担いうるかどうか、確認するために、光源氏は宣旨の娘と対面した。その様子を語る以下の文章を読んで、問一〜六に答えなさい。

さる所に①はかばかしき人しもありがたからむを思^{おぼ}して、「故院にさぶらひし宣旨の娘、宮内卿の宰相にてなくなりにし人の子なりしを、母なども亡^うせて、かすかなる世に経けるが、はかなきさまにて、子生みたり」と聞こしめしつけたるを、知るたよりありて、事のついでにまねび聞こえける人召^めして、さるべきさまにのたまひ契る。まだ若く、何心もなき人にて、明け暮れ人知れぬあばら家にながむる心細きなれば、②深^{ふか}うも思ひたどらず、この御あたりのことをひとへにめでたう思ひきこえて、まあるべきよし申させたり。いとあはれにかつは思^いして、出だし立てたまふ。

もののついでに、いみじう忍^{まき}び紛^{まき}れておはしまいたり。（A）さは聞^きこえながら、「いかにせまし」と思ひ乱れるを、いとかたじけなきによろづ思ひ慰めて、「ただのたまはせむまに」と聞こゆ。よろしき日なりければ、急がし立てたまひて、「あやしうB思ひやりなきやうなれど、思ふさまことなる事にてなむ。みづからもおほえぬ住まひにむすばほれたりし例^{ためし}を思ひよそへて、③しばし念じたまへ」など、事のありやうくはしう語らひたまふ。上の宮仕へ時々せしかば、見たまふをりもありしを、「いたう衰へにけり。家のさまも言ひ知らず荒れまどひて、さすがに大きなる所の、木立などとうましげに、いかで過ぐしつらむ」と見ゆ。人のさま若やかにをかしければ、ご覧じ放たれず。とかく戯^{たはが}れたまひて、「取り返しつべき心地こそすれ。いかに」とのたまふにつけても、「げに同じうは御身近うも仕うまつり馴^なれば、うき身も慰みなまし」と見たてまつる。

かねてより隔てぬなかとならはねど別^{わか}れは惜しきものにぞありける

慕ひやしましとのたまへば、うち笑ひて、

うちつけの別れを惜しむかかたことにて思はむ方に慕ひやはせぬ

馴れて聞こゆるを、いたしと思す。

(『源氏物語』みおつくし 澤標卷より)

[注]

○さる所——明石の君のもと。

○故院に……人の子なりし——「故院」は、光源氏の父帝、桐壺院。宣旨の娘の母は、かつて桐壺帝に仕えていた。父は、公卿にいたり、宮内卿(宮内省の長官)を兼ねた。

○もののついでに——光源氏が外出のついでに。第一段落で、宣旨の娘が都を出立したことを語った後、第二段落では、時間的にさかのぼって、出立直前の対面の場面を詳しく語ってゆく。

○いとかたじけなきに——恐れ多くも、光源氏の来訪を得て。

○みづからもおぼえぬ住まひにむすぼれたりし例——光源氏も都を離れて、須磨、明石でわび住まいを経験したことを指す。

○取り返しつべき心地こそすれ——光源氏の気持ち。明石に派遣するのをとりやめて、女房として仕えさせて傍らに置いておきたいという思いを抑えることができなくなつてしまふさうだ、の意。

○うちつけの別れ——会つてすぐに別れること。宣旨の娘が明石へ出立する直前のわずかな時間に行われた対面を、光源氏が名残惜しく思う。

○思はむ方——明石の君を指す。
○いたし——宣旨の娘が明石の姫君の乳母として申し分ない。

問三 傍線部①～③を、それぞれ現代語訳しなさい。

問四 傍線部(△)「さは聞こえながら、「いかにせまし」と思ひ乱れけるを」を、主語を明示し、かつ「さ」が指す内容を補って現代語訳しなさい。



次の文章は、菅原道真が藤原時平の策略によって左遷された事件(北野の御事)を中心に述べたものである。これを読んで、問一〜六に答えなさい。(本文の一部を省略したところがある。)

さて寛平は位につかせおはしましけるはじめより、「我が身は無下に聖主の器量にあらざ」とて、「①とく降りなん」と常に昭宣公に仰せ合はせけるを、「いかでか
 さること候はん」とのみ申されければ、「さらば一向に世のまつりごとをしてたべ」とうちまかせておはしましける程に、十年たもちおはしましける第六年かに、昭宣
 公うせ給ひ②にければ、その太郎の時平と菅 丞 相とを内覧の臣に定められて、遺誠書かせ給ひて三十一にて降りさせ給ひて、延喜の帝は醍醐天皇と申すに御讓位
 ありければ、十三にていまだ御元服もなかりけるを、今日ただ元服をして位につかんとて、にはかに御元服ありて摂政を用ゐられず、寛平の御遺誠のままに時平と天神
 とに、まつりごとを仰せ合はせてありけるほどに、十七の御歳、延喜元年に北野の御事はいできにけり。その事は、③帝ゆゆしきわが御ひがこと、大事を出したりと
やおほしめしけん、全て北野の御事、諸家、官外記の日記を皆焼けとて、焼かれにければ、確かにこのことを知れる人なし。④されども少々まじりて見ゆるところも
 あり。またかうほどのことあれば、人の口伝に言ひ伝へ言ひ伝へしたることにてあれば、ことのせんは皆見えるにや。権者たちの生まれて、かかることはありけるに
 や。されど、異人を権者といふことはなし。天神は疑ひなき観音の化現⑤にて、末代さまの王法をま近くまもらんとおぼしめして、かかることはありけりとあらは⑥
に知ることなり。時平の讒言といふ事は一定なり。浄蔵法師伝にも見えたり。さりながら⑦八年まではえ取らせ給はざりけるにや。天神の霊の時平につかせ給ひた
 りけるを、浄蔵が加持して、したたかに責めければ、仏法の威験に勝ちがたくて、浄蔵が父の善宰相清行存日なりければ、善相公に「⑧汝が子の僧呼びのけよ」とねん
 ごろに託宣して仰せられければ、浄蔵も恐れて去りにける後、つひに時平うせ給ひにけるとこそ見えて侍るめれ。この御心ならば、全て内覧の臣、撰録の家は、天神
 の御かたきにて失はるべきにてこそある⑨に。⑩やがて時平の弟の貞信公、家を伝へ、内覧撰政あやにくに繁昌して、子孫絶ゆることなく、今までめでたくて過ぎら
るることを深く案ずるには、日本国は小国なり、内覧の臣二人併びては一定悪しかるべし、大織冠の御あとを深く守らんとて、時平の讒口にわざとわざといりて御身を失ひて、
 しかも撰録の家を守らせ給ふなり。

〔注〕

- 寛平——元号。ここでは宇多天皇のこと。醍醐天皇の父で、先代に当たる。
- 昭宣公——藤原基経。藤原時平の父。
- 菅丞相——菅原道真。後出の「天神」も同じ。
- 内覧——天皇に奏上する文書を、あらかじめ閲覧する権限を有する重臣。
- 権者——仏や菩薩が、民衆を救うために仮に現れた姿。
- 浄蔵——平安中期の天台宗僧。
- 善宰相清行——三善清行。文章博士・参議などを歴任した官人で、浄蔵の父。
- 撰籙——撰政・関白のこと。
- 貞信公——藤原忠平。後年、撰政に就任した。
- 大織冠——藤原氏の始祖である、藤原鎌足のこと。

問三 波線部①～③を、それぞれ現代語訳しなさい。

次の文章を読んで、問一〜六に答えなさい。

今は昔、天竺の僧迦羅國にひとつの小伽藍あり。その寺に等身の仏おはす。この寺は、この国の前天皇の御願なり。仏の御頭には、眉間には玉を入れたり。この玉、世にならびなき宝なり。値限りなし。その時に貧しき人ありて、「この仏の眉間の玉限りなき宝なり。もしわれこの玉を取りて、買はむ人に与へたらば、子孫七代まで家樂しく、身豊かにして、貧しき思ひなからむ」。しかるに、この寺に夜半に入らむに、東西を閉ぢて、門戸守る人たゆみなく、たまたまに出入する人をば姓名を問ひ、行き所を尋ぬれば、①「さらばにずちなし」。しかりといへども、あひかまへて門戸のもとをうがちこぼちてみそかに入りぬ。寄りて仏の御頭の玉を取らむとするほどに、この仏、やうやく高くなり給ひて及び付かれず。(A)盗人高き物踏まへてまた及べども、いよいよ高くなりまさり給ふ。

しかれば、盗人、「この仏はもととは等身なり。かく高くなりまさり給ふは玉を惜しみ給ふなめり」と思ひて退き、合掌頂礼して仏に申さく、「仏の世に出でて菩薩の道を行じ給ひしことは、われら衆生を利益拔濟し給はむがためなり。伝へ聞けば、人をすくひ給ふ道には②身をもむさほらず、命をも捨て給ふ。いはゆる一羽の鳩に身を捨て、七つの虎に命を亡ぼし、眼をくじりて婆羅門に施し、血を出だして婆羅門に飲ましめ、かくのごとくのがたきことをそら施し給ふ。いかにいはんや、この玉を惜しみ給ふべからず。貧しきをすくひ下賤を助け給はむ、ただこれなり。③おぼろげにては仏の眉間の玉をば下ろすべしやは。なまじひに生きめぐりて、世間を思ひわびて限りなき罪障を造らむとす。いかでかく高くなり給ひて頭の玉を惜しみ給ふ。(B)思ひにすでに違ひぬ」と哭く哭く申しければ、仏高くなり給ふ心地に頭をたれて盗人の及ぶばかりになり給ひぬ。しかれば、「仏、わが申すことによりて、玉を取れとおぼしめすなりけり」と思ひて、寄りて眉間の玉を取りて出でぬ。夜明けて、寺内の比丘どもこれを見て、「仏の眉間の玉は、いかなればなきぞ。盗人の取りてけるなめり」と思ひて求め尋ぬれども、誰人の盗めると知らず。

その後、この盗人、この玉をもつて市に出でて売るに、この玉を見知れる人ありて、「この玉は、その寺にまします仏の眉間の玉近ごろ失せたる、これなり」と云ひて、この玉売る者を捕へて、国王に奉りつ。召し問はるる時に、隠さずしてありのままに申す。④国王このことを用ひ給はずして、かの寺に使ひを遣はして見せしめ給ふ。使ひかの寺に行きて見るに、仏頭をうなだれて立ち給へり。使ひかへりてこの由を申す。国王この由を聞き給ひて、悲しびの心をおこして盗人を召して、値を限

らず玉を買ひ取りて、もとの寺の仏に返し奉り給ひて、(c) 盗人をばゆるしつ。

まことに心をいたして念ずる仏の慈悲は、盗人もあはれ給ふなりけり。その仏、今に至るまでうなだれて立ち給へりとなむ語り伝へたとや。

(『今昔物語集』より)

[注]

○僧迦羅国——現在のスリランカ。

○伽藍——寺院。

○御願——国王・后・王子などの発願によって建てられた寺。

○合掌頂礼——手を合わせ、頭を地につける最敬礼。

○菩薩の道——悟り(仏)の世界の一步手前にとどまつて、衆生救済に努めること。

○利益拔濟——利益をほどこし、救済すること。

○一羽の鳩に身を捨て——鷲じゆに襲われた鳩を助けるために、自分の肉を鷲に与えたという釈迦しやかの前世の話。

○七つの虎に命を亡ぼし——飢えた母虎と七頭の子虎のために自分の身を与えたという釈迦の前世の話。

○眼をくじりて婆羅門に施し——盲目の婆羅門に自分の目を与えたという釈迦の前世の話。

○婆羅門——古代インドの身分制で最高位にある僧侶・祭司階級の人。

○血を出だして婆羅門に飲ましめ——飢えた婆羅門に自分の血を飲ませたという釈迦の前世の話。

○心地に——様子を見せながら。

○比丘——出家した男性。

問三 傍線部①～④を、それぞれ現代語訳しなさい。

次の文章は、平治の乱で敗れた源義朝の妻の常葉が、三人の男児を伴って平清盛のもとに出頭した場面である。これを読んで、問一～五に答えなさい。

大式清盛、常葉を召し出しければ、子供引き具し、清盛の宿所へ出でけり。六子・八子、左右の傍に居たり。二歳の牛若は懐にあり。常葉、泣く泣く申しけるは、
 「左馬頭 罪深き身にて、その子供、皆うしなはれんを、一人をも助けさせ給へと申さばこそ、そのことわりしらぬ身にも候はめ。子供、かくもならざらんさきに、
 まづこの身をうしなはせ給へと申さんを、などか聞こしめされでは候ふべき。高きも卑しきも、親の子を思ふ心のやみは、さのみこそ候へ。この子供にわかれて、片時
 もたへてあるべき身とも覚え候はず。(一) わらはをうしなはせ給ひて後にこそ、子供をば御はからひ候はめ。このころざしを申さんためにこそ、左馬頭が草の陰に恥
 を見せて、かかる憂き形勢を思ひも知らず、これまで参りて候へ。この世の御なさけ、後の世の御功德、何事かこれに過ぎ候ふべきこと、泣く泣くどき申せば、六子、
 母の顔をたのもしげに見あげて、(二) 泣かで、よくよく申したべや」といひければ、ただ今までも、よに心強げにおはしける大式殿も、「けなげなる子がことばか
 な」とて、傍にうち向きて、しきりに涙をながされけり。兵ども、あまた並み居たりけるに、涙にむせびてうつぶさまになり、面を上げたる者もなし。
 常葉が歳、二十三なりき。中官の官女にてもなれたるうへ、思ひ胸にあれば、ことば、口に出でて、たけき武士もあはれと思ふばかりに申しつづけて、青きまゆ
 ずみ、ふかき涙に乱れ、嘆き日数を経て、(三) その人ともなくやせおとろへたれども、なほ世のつねに越えたり。見る人、これをあはれまずといふことなし。「これほど
 の美女をば、目にも見ず、耳にも聞きおよばず」と申しあひければ、ある人、申しけるは、「よきこそ、ことわりなれ。大宮左大臣伊通公の中宮御所へ、見目よから
 ん女を参らせんとて、よしときこゆる程の女を、九重より千人召されて百人えらび、百人より十人えらび、十人がうちの二にて、この常葉を参らせられたりしかば、わ
 ろかるべきやうなし。さればにや、見れども見れども、めづらかなるかほばせなり。唐の楊貴妃・漢の李夫人が、一度笑めば百の媚をなしけんも、これには過ぎじ」と
 と、たはふれ申す人もあり。

常葉、伊勢守が宿所に帰りぬ。そののち、あらし足音の聞こゆる時は、「今や、わが子供をうしなひに来たるらん」と、肝魂も身にそはず。(四) 母は子供が顔を、「今
 いつまで」とまもりて泣く。子供は又、たのもしからぬ母をたのみて、手にとりつきて見あげて泣く。互ひにつきせぬ涙のいる、袖にあまりてせきあへず。大式清盛、

宣のたまひ(イ)は、「義朝が子供のこと、私に清盛がはからふべきにあらず。賞罰のことは、勅定にまかせて奉行するばかりなり。なほうかがひて、天氣にこそよらめ」と宣へば、六波羅の人々、「いかにかやうに、御心よわきことをば仰せられ候ふぞ。この幼き者ども三人が生ひ立ちなば、末の世、いかなる大事をか引き出し候はんずらん。御子孫のためこそ、いたはしけれ」と諫めければ、清盛、「たれもさこそは思へども、おとなしき兵衛佐を、池殿助けんと申さるるうへは、成人の頼朝をば助けて、幼き者をばきらんこと、そのいはれ、さかさまなるべし。いひてもいひても、頼朝が死生ししやうによるべし」とぞ、宣ひ(ロ)。

常葉、「一日片時も、命のあるこそ不思議なれ。これさながら、清水の観音の御助けなり」とたのもしくて、わが身は観音経をよみ、子供には観音の御名を教へて唱へさせけり。兵衛佐が死罪のこと、池殿、やうやうに申され(ハ)ば、死罪ゆるされて、流罪にぞなりにける。「これ、ただことにあらず。八幡大菩薩の御はからひなり」と、信敬極まりなし。兵衛佐は、東国伊豆国へながさるべしと定まりてけり。まして常葉が子供は幼ければ、「助かりぞせんずらん」と申しあへりしが、子細なく、罪科なき者どもなりとて、(B)死罪をなだめられけり。

(『平治物語』より)

[注]

○六子・八子——当時六歳であつた乙若おとわかと、八歳であつた今若いまわかのこと。

○左馬頭——源義朝のこと。

○天氣——天皇の意向。

○池殿——池禪尼いけのぜんにのこと。清盛の継母に当たる。

○成人——元服した人。

○伊勢守——清盛の部下であつた、伊藤景綱いとうかげつなのこと。

○兵衛佐——源頼朝のこと。

問三 傍線部(a)～(c)を、それぞれ現代語訳しなさい。

次の文章を読んで、問一〜六に答えなさい。

大殿・小殿とて聞こえある強盗の棟梁ありけり。大殿は、(a)後鳥羽院の御時からめられけり。小殿、高倉の判官章久がもとへ行きていひけるは、「日ごろ年ごろからめかねて、あなぐり求められ候ふ小殿と申す強盗こそおもふ様ありて参りて候へ。はやく(b)うけとらせ給へ」といふ。章久まことしからずおぼえながら、おろろ子細を問へば、小殿いはく、「御不審候ふ事、もつともそのいはれ候へども、まづおぼしめし候へ。ただのしらが強盗とみづから名乗りて(c)命をまかせまぬらせて何のせんか候ふべき」といへば、げにもことわりにて、くはしく問答するに、小殿がいふやう、「年ごろ西国のかたにて海賊をし、東国にては山立をし、京都にては強盗をし、辺土にてはひきはぎをして過ぎきつるなり。かかる重罪の身をうけ候ひぬれば、この世にてもやすき心候はず、夜もやすくもねず、昼も心うちくつるぐ事なし。世のおそろしく、人のつつましきこと、かなしき苦患にて候ふなり。さても(1)一期ことなくてあるべき身にても候はず。つひにはさだめてからめいだされて恥をさらし、かなしき目をこそ見候はんずれば、人手にかからんよりは、心と参りて、かつは年ごろの罪をもむくはんがために、頸をのべて参りて候ふなん」といへば、章久あはれにおほえて、左右なくもうけとるべけれども、その儀なくして、答へけるは、「いまは使庁の庁務停止したるなり。かつは聞きもおよぶらん。(2)年ごろつくりおける牢どもみなうちやぶりて仏所につくりなどして、一向庁務をとどめて、後世のことをいとむなり。徳大寺殿に祇候の源の判官康仲こそ、当時ことに高名をたてんとする人なれ。かしこに行きてこの子細をいはば、さだめて悦びおもはんずらん」といへば、「さ候はば、御文をたまはり候ひて、源の判官殿へ参り候はん」といへば、「それはやすき事なり」とて、文書きとらせければ、即ち持ちて康仲がもとへ行きて、章久がもとにていひつるがごとくにいひて、「もし万が一、命をいけて、召しもつかはれ候はば、別の奉公には、余党その数おほく候ふを、一々に(3)からめさせまめらせん」といへば、康仲興ある事に思ひて、うけ取りてつかひけり。給物三十石をとらせて朝夕召しつかふに、事おきてかひがひしく大切の事もおほかりければ、大納言家にこのやうを内々申し入れたりけるに、「いと興ある事こそ。日さやうの者は、中々さるかたもあるなり。我に得させよ。召しつかはん」と仰せられければ、参らせてけり。侍ひゆるされて召しつかひけり。康仲が恩のうへに、五十石の給物をたまはせたりければ、小殿よろこびて、「今はかくて一期身やすくてやみなんずれば、おもふ事候はず。祇候のあひだには、いかにも御所中なら

びに御近辺には狼藉ろうぜきのことあらすまじく候ふ」とて、一向に御とのみして奉公をいたしければ、誠にかひがひしく、そのあたりには夜の恐れなかりけり。

(『古今著聞集』より)

〔注〕

○棟梁——統率者、責任者。

○山立——山賊。

○徳大寺殿——藤原実基(一一〇一～一二七三)。

○使庁——検非違使庁のこと。犯罪者を取り締まり、裁く役所。

○給物——ほうび、給料。

○大納言家——実基はこの時、権大納言であった。

問三 傍線部①、②、③を現代語訳しなさい。

次の文章は、『平家物語』の一節である。三位中将、平重衡は、源氏との戦いに敗れ、捕えられて都に移送された。重衡に仕える木工右馬允知時という武士が、捕われの身となった重衡のもとを訪れた。文章を読んで、問一〜六に答えなさい。

三位中将の年ごろ召しつかはれる侍さむらいに、木工右馬允知時といふ者あり。八条の女院にようめんに候ひけるが、土肥次郎とひのじらうがもとにゆきむかつて、「是は、中将殿に先年召しつかはれ候ひし某それがしと申す者にて候ふが、西国へも御供つか仕まつるべき由存じ候ひしかども、八条の女院にようめんに兼参けんさんの者にて候ふ間あひだ、力及ばでまかりとどまつて候ふが、今日大路で見まゐらせ候へば、目も当てられず、いとほしう思ひ奉り候ふ。しかるべう候はば、御許かうむされを蒙かうむつて、近づき参り候ひて、今一度見参けんさんに入り、昔語りをも申して、なぐさめまゐらせばやと存じ候ふ。させる弓矢とる身で候はねば、いくさ合戦の御供を仕まつりたる事も候はず。ただ朝夕しゆう候せしばかりで候ひき。さりながら、なほおぼつかなう思しめし候はば、腰の刀を召し置かれて、まげて御許かうむされを蒙かうむり候はばや」と申せば、土肥次郎なさけある男をとこにて、「御一人ばかりは何事か候ふべき。さりながらも」とて、腰の刀をこひとつて入れてんげり。右馬允みぎうまのりのめならず喜んで、急ぎ参つて見奉れば、まことに思ひ入れ給へるとおぼしくて、御姿もいたくしをれかへつて居給へる御有様を見奉るに、知時涙もさらにおさへ難し。三位中将も是を御覧じて、夢に夢見る心地して、とかうの事ものたまはず。ただ泣くより外ほかの事ぞなき。やや久しうあつて、昔今の物語どもしたまひて後、「さてもなんぢして物言ひし人は、いまだ内裏うちらひにとや聞きく」。『さこそ承り候へ』。『西国へ下りし時、文をもやらず、言ひおく事だになかりしを、世々のちぎりはみな偽いつはりにてありけりと思ふらんこそ』はづかしけれ。文をやらばやと思ふは。尋ねて行きてんや』とのたまへば、「御文を賜たまはつて参り候はん」と申す。中将ちゆうじやうのめならず喜んで、やがて書いてぞたうだりける。守護の武士ども、「いかなる御文にて候ふやらん。いだしまゐらせじ」と申す。中将「見せよ」とのたまへば、見せてんげり。「くるしう候ふまじ」とて、とらせけり。

知時もつて内裏へ参りたりけれども、昼は人目のしげければ、その辺へん近ちかき小屋に立ち入つて、日を待ち暮らし、局つねの下口辺しもぐちにたらずんで聞けば、この人の声とおぼしくて、「いくらもある人のなかに、三位中将しも生け取りにせられて、大路をわたさるる事よ。人はみな奈良を焼きたる罪のむくいと言ひあへり。中将もさぞ言ひし。『わが心におこつては焼かねども、悪党おほかりしかば、手て々に火を放つておほくの堂塔を焼きはらふ。末すゑのつゆ、本のしづくとなるなれば、われ一人が罪に

こそならんずらめ』と言ひしか。^(B)げにさとおほゆる^(C)とかきくどき、さめざめとぞ泣か^(D)れける。右馬允、^(E)是にも思はれるものをどいとはしう覚えて、「もの申さう」と言へば、「いづくより」と問ひ給ふ。「三位中将殿より御文の候ふ」と申せば、年ごろは恥ぢて見えたまはぬ女房の、せめての思ひのあまりにや、「いづらや、いづら」とてはしり出でて、手づから文をとつて見給へば、西国よりとられてありしありさま、今日明日とも知らぬ身のゆくすゑなど、こまこまと書きつづけ、奥に一首の歌ぞ有りける。

^(C)涙河うき名を流す身なりともいま「たびのあふせともがな

女房これを見給ひて、とかうの事ものたまはず、文をふところに引き入れて、ただ泣くより外の事ぞなき。

[注]

○三位中将——平重衡(一一五七～一一八五)の官職。

○木工右馬允知時——「木工右馬允」は知時の官職。

○八条の女院——鳥羽天皇皇女、暲子内親王(一一三七～一二二一)。

○兼参——三位中将と八条女院の両方に仕えていること。

○たうだりける——「たびたりける」の音便形。

○奈良を焼きたる罪——治承四年(一一八〇)、平重衡らが敵対する奈良の東大寺、興福寺などを焼き討ちにした事件。

○悪党——暴徒化したやから。

問一 傍線部①、②、③を現代語訳しなさい。

次の文章は、江戸幕府の五代将軍徳川綱吉に仕えた柳沢吉保の半生を、側室の正親町町子(二六七六〜一七二四)が見聞きして綴った『松蔭日記』の一節である。これを読んで、問一〜五に答えなさい。

をしめども春のかぎりはかなく暮れて、卯月にもなりぬ。鶴姫君の、日頃あつしくおはしますが、この頃となりては、いと苦しうのみせさせ給へれば、こなたかなた御心まどはし給ふ。御所には、とりわき驚き思し召して、いみじう心もとながり聞こえさせ給へれど、限りあればいといぶせく、わりなきことと思すべし。こなた、例のうしろみだちて日ごとにもあり給ひて、何くれのこと、あつかひ聞こえ給ふ。御所にも、絶えずこまかに申し奉らせ給へば、これにぞ、また、かたへはうしろやすく、御心やすまりぬべし。かく言ひ言ひて、日数も過ぎ行く。御なやみ、なほいとたのもしげなくのみおはしませば、大かた天が下のなげきなり。ここにも、いとど御いとまなげにおりたちあつかひ奉らせ給ふ。

かかるほどに、十二日の夜中ばかり、にはかに、いと御気色かはらせ給ひぬ。とみにおはしますべくとがしこより御消息聞こえたり。こはいかにと、聞き驚き給うて、御馬いそぎ奉りて、とりあへず参らせ給ふ。何くれとして、いたう夜更けぬ。十二日の月は入りて、道のほどいとたどどしきに、まして心いられし給へば、常よりはいとどほど遠き心地して、まどひいそがせ給ふ。

いそぎ来し使ひにつれて乗る馬の暗き夜たどる道のはるけさ

など、詠ませ給ひつるは、後にぞ聞き侍りし。かしこにおはしつきたるに、はや、とく絶えいらせ給ひぬ。そこら、たれもたれも足を空に思ひまどへるほど、夢の心地してあさましきこと、物に似ず。

おはしましても、なほさまさま残るところなく、いみじきことしつくさせて、あつかひ聞こえ給へど、異にがぎりの御有様はしるくてやうやう甲斐なし。かくのみあるべきならねば、まづ御所に参りて、申し奉らせ給ふ。日頃もいと頼みなきさまにのみ聞き奉らせ給へど、なほいかにいかにと思しわたりつるを、いまはと思しなしたる御心の闇思ひやるべし。常なきならひはこころ世を聞くが中にも、これは今の世にやむことなき御いつき娘におはしまして、含章の春の夕べには軒端の梅の花

のよそひならびなし。秦楼しんろうの物の音澄みわたたりて、雲居しんろうをかけるあしたづもおのがよはひをこそ譲り奉りつれ。⑥はかなきあしたの露 かけて聞こえ奉るもあさまじうなん。

こなたはあかつきにぞまかで給ふ。昔より世とともに大小のこと、かしづき聞こえ給ひて、人よりことに御心やすきものに思ほし、御なやみの日頃もおろかならずつきそひ給へりしことなど、いも寝ず、つくづくと思し続けて、悲しう胸ふたがる心地し給ふ。つとめて、ほととぎすの鳴くを聞き給うて、

折しもあれ⑦かかるながめをほととぎす空に知りてや鳴く音そふらん

いみじう悲しきことに思したるもことわりになん。⑧御所にはかけても聞こえせんやは。

(『松蔭日記』「ゆかりの花」より)

[注]

○卯月——宝永元年(一七〇四)四月。

○鶴姫君——徳川綱吉の長女(一六七七〜一七〇四)。

○御所——徳川綱吉(一六四六〜一七〇九)

○こなた——柳沢吉保(一六五八〜一七一四)。

○足を空に思ひまどへる——足も地につかないほどあわてる。

○いみじきこと——蘇生術。

○「こころ世を聞くが中にも——」「こころ世を聞くが中にも悲しきは人の涙も尽きやしぬらむ」(『後撰和歌集』哀傷・伊勢)を踏まえる。

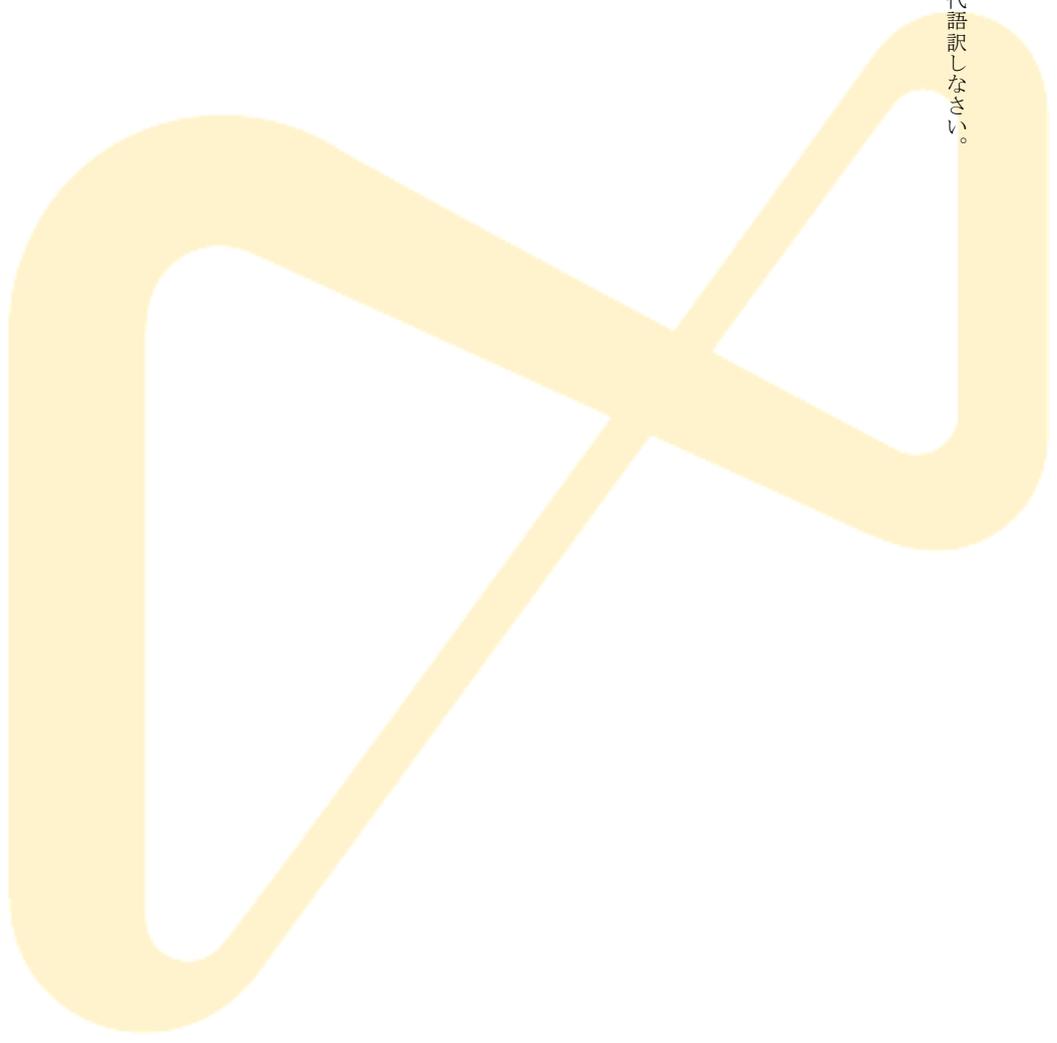
○含章の…よそひ——宋の武帝の娘の寿陽公主が含章宮のほとりに横たわった時に、梅の花が公主の額に落ちかかり、美しい綾あやを成したという故事を踏まえる。

○秦楼の…澄みわたたりて——秦の穆公ぼくこうの娘の弄玉ろうぎよくが簫の名手で、秦楼で簫を吹くと鳳凰ほうおうが飛来したという故事を踏まえる。

問一 傍線部②、③、④をそれぞれ現代語訳しなさい。

問四 傍線部⑤について、

1 適切に言葉を補って現代語訳しなさい。



【解答一】2023 神戸大学 2/25. 前期文 国際人間科 法 経済 経営 海洋政策科

問一 ① 長年経って

② 入水する運命であるのだろう

③ ああ、ただ今引き留めなさいませ

④ 火や水に入って死ぬ苦しみは並一通りではない

《出典》鴨長明「菟心集」一部省略

【解答二】2022 神戸大学 2/25. 前期文 国際人間科 法 経済 経営 海洋政策科

問一

① このように私に逢いに来ないでください

② 仏道を熱心に信仰しなさって

③ 男がそこにいるようだと言ったと笛の音や声を聞くけれども

《出典》「伊勢物語」

【解答三】2021 神戸大学 2/25. 前期文 国際人間科 法 経済 経営 海洋政策科

問一

① 大臣の御前に伺候している人々を下がらせてください

② 親より先にはまさか飲みなさらないであろうから

③ お亡くなりになるような時

④ 衣をひきかぶって臥しなさる

《出典》「平家物語」

【解答四】2020 神戸大学 2/25.前期文 国際人間科 法 経済 経営

問三

- ① 鳥羽天皇がいらっしゃって
- ② 堀河天皇がご覧になったならば、どれほど賞賛なさっただろうか
- ③ 堀河天皇は自室に退いていた私に
- ④ 私は鳥羽天皇に気付かせ申し上げないようにしようと、何でもないように振る舞いながら

《出典》「讃岐典侍日記」

【解答五】2019 神戸大学 2/25.前期文 国際人間科 法 経済 経営

問三

- ① 臨終である様子になってしまった
- ② 迷いを去って真理を知る境地に入ることがあり、この上なくすぐれた僧
- ③ やはり体が動くような間は
- ④ 息子が書こうとした文字は「ふ」であるようだ

《出典》「今昔物語集」

【解答六】2018 神戸大学 2/25.前期文 国際人間科 法 経済 経営

問三

- ① しっかりした人などめったにいないだろう

② あまり深く考えることもない

③ しばらく我慢なさってください

問四 宣旨の娘は、「明石の姫君の乳母として出世するつもりだと」、源氏の君に申し上げたものの「どうしたらよいだろうか」と、あれこれ思い悩んでいた。

《出典》紫式部「源氏物語 滯標巻」

【解答七】2017 神戸大学 2/25, 前期文 国際人間科 法 経済 経営

問三

① すぐに帝の位から降りよう

② 帝は、ひどい自分の過ちが、たいへんな事態を引き起こしてしまったとお思いになったのであろうか、

③ 八年目までは時平の命をお取りになることができなかつたのであろうか。

《出典》慈円「愚管抄」

【解答八】2016 神戸大学 2/25, 前期文 国際文化 発達科 法 経済 経営

問三

① 全くどうすることもできない。

② 自分の身をも執着せず、

③ いいかげんな気持ちで仏の眉間の玉を取り外すことなどでははしない。

④ 国王は（仏が眉間の玉を与えてくれたという）盗人の言葉をそのままお信じにはならず、

《出典》「今昔物語集」

【解答九】2015 神戸大学 2/25, 前期日程文 国際文化 発達科 法 経済 経営

問三 (a) 私を殺しなさって後に、子供たちを処置なさってください。

(b) 常業とも思えないほど痩せ衰えているが、やはり世間並みの美しさを超えている。

(c) 母は子供たちの顔を「あといつまで命があるだろうか」と思い、じっと見つめて泣く。

《出典》『平治物語』

【解答十一】2014 神戸大学 2/25, 前期日程文 国際文化 発達科 法 経済 経営

問三

① 命を任せ申し上げて、何の効果がございませうか、いや、何もございませぬ

② 一生何事もなく無事に済むはずの身ではございませぬ

③ 長年建ててあった牢なども、皆壊して仏所に作り変えたりして

《出典》「古今著聞集」

【解答十一】2013 神戸大学 2/25, 前期日程文 国際文化 発達科 法 経済 経営

問一

① あなたお一人だけなのに、どうして刀を持っていて危険なことがございませうか、いや、ございませぬ

② あなたを遣わして恋文を届けていた女は、まだ宮中にいると聞いているが

③ これほど慕われていたのかと、気の毒に思われて

《出典》「平家物語」

【解答十一】2012 神戸大学 2/25, 前期日程文 国際文化 発達科 法 経済 経営

問一

② すぐにいらっしやるようにと、綱吉から御消息文を差し上げてきた。

③ まして吉保様は気が急かれないので、いつもより距離がとても遠く感じられて、

④ 鶴姫様がお亡くなりになった様子だと、はっきりと判って、

問四

1 ほととぎすの鳴き声を、綱吉には少しでも聞かせてはならない。

《出典》「ゆかりの花」『松蔭日記』